

Athénée Français Cultural Center (Tokyo)

# ストロブ＝ユイレの軌跡 1962-2016

## Rétrospective Straub-Huillet 1962-2016

会場:アテネ・フランセ文化センター (御茶ノ水)

日程:

第1期:2017年12月5日(火)～12月9日(土) (日曜・月曜休館/5日間)

第2期:2017年12月12日(火)～12月16日(土) (日曜・月曜休館/5日間)

第3期:2018年1月23日(火)～1月27日(土) (日曜・月曜休館/5日間)

第4期:2018年2月20日(火)～2月24日(土) (日曜・月曜休館/5日間)

第5期:2018年2月27日(火)～3月3日(土) (日曜・月曜休館/5日間)

映画による抵抗運動を続ける

ジャン・マリイ・ストロブとダニエル・ユイレ。

2006年、同志にして伴侶であったユイレを失った後も

過激な映画制作を展開するストロブ。

デジタル時代に入ってもその創作意欲は衰えを知らない。

1962年の処女作『マホルカムフ』から2016年の

『目下の進捗状況は？ ジャン・マリイ・ストロブ』まで

46作品を一挙上映。

1985年のテレビ作品『四部の提案』も日本初公開



# ストローブ=ユイレの軌跡 1962-2016 Rétrospective Straub-Huillet 1962-2016

マホルカ=ムフ 1962年(18分/35mm版)

Machorka-Muff  
撮影=ヴァンデリン・ザハトラ  
ストローブ=ユイレの処女短編。ハインリヒ・ベルの短編「首都日記」に基づき、西ドイツの首都ボンを舞台に、元ナチの軍人マホルカ=ムフを通し、戦後の再軍備をユーモラスに風刺する。主演は作家・ジャーナリストのアーリー・クーパー。



オトン 1969年(88分/35mm版)

Les yeux ne peuvent pas en tout temps se fermer ou Peut-être qu'un jour Rome se permettra de choisir à son tour (Othon)  
撮影=ヴィゴ・ヒッコレー

17世紀フランス・バロック演劇の大作家ジュール・ロルネイユの埋もれた悲劇「オトン」を、現代のローマの廃墟で、フランス語の不得手な素人が演じる。暴君ネロ亡き後の混乱する帝政ローマの政略劇が、恋の駆け引きを交えて語られる。



歴史の授業 1972年(85分/16mm版)

Geschichtsunterricht  
撮影=レナート・ベルタ  
ブレヒトの未完の長編小説「ユルグ・カエサル氏の商売」の一部を再構成。カエサルの共和制ローマが資本主義の台頭と共に不正を生み出す過程を、カエサルの同時代人たちが、現代のローマ市街を車で移動する現代の青年に対し証言する。



アーノルト・シェーンベルクの《映画の一場面のための伴奏音楽》入門 1972年(15分/16mm版) Einleitung zu Arnold Schoenbergs "Begleit-musik zu einer Lichtspielszene"  
撮影=レナート・ベルタ

1923年に作曲家シェーンベルクが、友人の画家カンディンスキーの反ユダヤ主義的発言に対して書いた激烈な絶筆状の朗読に、シェーンベルクが架空の映画音楽として作曲した曲が重なる。1935年のブレヒトの反資本主義演説も引用される。



雲から抵抗へ 1978年(105分/35mm版)

Dalla nube alla resistenza  
撮影=サヴェリア・ディアマンティ  
イタリアの作家チェザレ・パヴェーゼの未完の神話的対話篇集「レウコとの対話」の6篇「罌」[キマイラ]「盲人たち」[狼人間]「客」[火]を映画化した第一部と、パヴェーゼ最後の長編小説「月と篝火」を圧縮再構成した第二部からなる。



早すぎる、遅すぎる 1980-81年(101分/16mm版)

Trop tôt, Trop tard  
撮影=ウィリアム・ルブシヤンスキ(第一部)、ロベール・アラスキ(第二部)  
風景が映し出される中、第一部ではエンゲルスのカウチー宛て書簡に基づき、18世紀末フランス農村の貧困状況が分析され、第二部では、マルクス主義的階級史観に基づき、近現代のエジプトにおける農民蜂起の歴史が画面外で語られる。



アン・ラジャシャン 1982年(8分/25mm版)

En Ruchächant  
撮影=アンリアルカン  
五月革命の影響下に書かれたマルグリット・デュラス唯一の童話「ああ!エルネスト」の映画化。7歳の小学生エルネストは登校拒否宣言をし、両親と共に小学校の教室で教師と面談する。だが教師は結局、エルネストを説得することができない。



黒い罪 1988年(40分/35mm版)

Schwarze Sünde  
撮影=ウィリアム・ルブシヤンスキ  
ヘルダーリンの「エンベドクレスの死」の1820年執筆の第三稿の映画化。ストローブ=ユイレはこの第三稿は映画化不可能と考えていたが、ベルリン・シヤウビューネ劇団による舞台脚色版に不満を覚え、原作に忠実な映画化を決意した。



セザンヌ 1989年(50分/35mm版)

Cézanne  
撮影=アンリアルカン  
詩人ジョアシャン・ガスケの著作「セザンヌ」に含まれるセザンヌの発言の朗読に重ねて、セザンヌゆかりの土地やセザンヌの絵が映し出される。ジャン・ノワール監督の「ボヴァリ夫人」の技枠と共に「エンベドクレスの死」からの二つの技枠の挿入もある。



アンティゴネー 1991-1992年(100分/35mm版)

Die Antigone des Sophokles nach der Hölderlinschen Übertragung für die Bühne bearbeitet von Brecht 1948  
撮影=ウィリアム・ルブシヤンスキ  
ベルリン・シヤウビューネ劇団の委嘱による舞台演出に基づく映画。ソボクレスの悲劇「アンティゴネー」をヘルダーリンが特異な方法でドイツ語に翻訳し、それを基に1948年にブレヒトが改訂した版を古代円形劇場で様式的に映画化している。



労働者たち、農民たち 2000年(123分/35mm版)

Ouvriers, paysans (Operai, contadini)  
監督=レナート・ベルタ  
ウットーリニの未完の長編小説「メッシーナの女たち」の文藝的な複数の独立した章を映画化。イタリアで終戦直後の混乱の中、行き場を失った労働者、農民たちがあがる山中で共同体を作り、苦難を乗り越え、ひと冬を越した物語が、夏の濡れ谷で語られる。



放蕩息子の帰還 辱められた人々 2003年(64分/35mm版)

Il ritorno del figlio prodigo/Umlitari  
撮影=レナート・ベルタ  
「労働者たち、農民たち」の挿話を再利用した「放蕩息子の帰還」と、その後日譚「辱められた人々」の二部構成。後者では、山中の共同体に地主代行や元バルチザンらが訪れ、土地所有権を侵害する違法性、自給自足経済の割りの悪さを説き、共同体を崩壊させる。



ルーブル美術館訪問 2004年(48分/35mm版)

Une visite au Louvre  
撮影=ウィリアム・ルブシヤンスキ、レナート・ベルタ  
映画「セザンヌ」に続き、ジョアシャン・ガスケの創作的回想録「セザンヌ」のガスケとの対話の一部を参照しつつ、セザンヌが見たであろうルーヴル美術館所蔵の美術作品を注視する。対話の形で語られるセザンヌの思弁的な絵画論が女性の声で画面外で語られる。



ジャン・ブリカールの道程 2008年(40分/35mm版)

Itinéraire de Jean Bricard  
撮影=ウィリアム・ルブシヤンスキ  
ジャン・ブリカールは1932年にローレル河近辺で生まれ、その地域で暮らし、92年に引退するまでヴェルト島の砂質採取事業の責任者だった。ドイツ占領期などの過去を振り返る彼の談話は、1994年2月24日に社会学者ジャン=イヴ・ブチーが録音したものである。



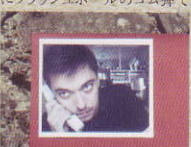
魔女=女だけで 2009年(21分/35mm版)

Le sireghe, femmes entre elles  
撮影=レナート・ベルタ  
「レウコとの対話」の1篇、魔女キルケと女神リュコテアーの対話「魔女」の映画化。仏語題「女だけで」は同じパヴェーゼ原作のアントニオ・ニ「女と女たち」(1955)の仏語題。ジョヴァンナ・ダッティ、ジョヴァネッタ・ジュリアーニ出演。



ジョアシャン・ガッティ 2009年(2分/デジタル)

Joachim Gatti  
2009年7月8日、34歳の活動家、映画作家ジョアシャン・ガッティはモントリオールでデモ活動中、警官にフラッシュボールのゴム弾で撃たれ、片目が破裂し、視力を失った。本作では、事故以前の彼の写真にルソーのテキストがかぶさる。



ジャックとアラブ人 2011年(11分/デジタル)

Schakal und Araber  
撮影=クリストフ・フラヴヴェール  
フランツ・カフカの寓話短編の映画化。音楽は、ジョルジュ・クルターク「カフカ断章」作品24(1986)第四部第39曲「またもや、またもや」。出演は、マルバラ・ウリヒとジョルジュ・バッセロニ。ストローブが声のみ出演。



慰めようのない者 2011年(15分/デジタル)

L'inconsovable  
撮影=レナート・ベルタ、クリストフ・フラヴヴェール  
「レウコとの対話」の一篇の映画化。吟遊詩人オルベウスを八つ裂きにする運命にあるバグラー(略す狂暴なトラキアの女)の一人にジョヴァンナ・ダッティ、最愛の妻エウリュディケーを亡くしたオルベウスにアンドレー・ダ・バッチ。



母 2012年(20分/デジタル)

La madre  
撮影=クリストフ・フラヴヴェール  
「レウコとの対話」の一篇に基づき、女狩人アタランテーを含む勇士らと猪狩りに参加した、王の息子メレアグロスは、母親アルタイアニーの呪いで殺された。ヘルメースにジョヴァンナ・ダッティ、メレアグロスはダリオ・マルコンチーニ。



ヴェネツィアについて(歴史の授業) 2014年(24分/デジタル)

À propos de Venise  
撮影=クリストフ・フラヴヴェール  
河岸の木と枝の長廻し2ショットを重ね、パレスの旅記「愛と悲しみの聖地」(1903)の一篇「ヴェネツィアの死」第3章「アドリア海の水平線上に漂う影たち」の一節が続かれる。ナポレオン、ゲーテ、シャドールブリアンの歴史的記憶。最後にバッチ映画(1968)よりカンタータBWV205の Aria が演奏される。



共産主義者たち 2014年(70分/デジタル)

Kommunisten  
撮影=クリストフ・フラヴヴェール  
2014年スイスのローレルでCanon5Dで撮り下ろした、マルローの同名小説(1935)に基づき「侮蔑の時代」に、ストローブ=ユイレの旧作5本「労働者たち、農民たち」「フォルトゥーニ/シナイの人たち」「早すぎる、遅すぎる」「エンベドクレスの死」「黒い罪」からの技枠を加えた6部構成の作品。



アルジェリア戦争! 2014年(2分/デジタル)

La guerre d'Algérie  
精神分析医ジャン・ラントレットのテキストに基づき、室内のワンショットで撮られたシネマティック。あるフランス人の男がもう一人の男を銃で脅しながら、かつてアルジェリア戦争で殺人を命じた上官を殺して逃げた過去を語る。出演者は本作の撮影監督クリストフ・フラヴヴェールと録音技師デビッド・オリ。



**妥協せざる人々** 1964 - 65年 (55分/35mm版)  
 Nicht versündigt oder Es hilft nur Gewalt, wo Gewalt herrscht  
 撮影=フアン・デリン、ザ・パトラー  
 複数の時制が交錯する。ベルの長編小説「九時半の玉突き」を、55分に圧縮再構成。ケルンのある現在の一日を中心に、三世代にわたる建築家一族の敷居な歴史を語りながら、戦後権力を掌握し続ける旧ナチ関係者を痛烈に風刺する。



**モーゼとアロン** 1974 - 75年 (105分/35mm版) Moses und Aron  
 撮影=ウーゴ・ピッコネ、サヴェリオ・ディアマンティ、レナート・ベルタ / 出演=ギュンター・ライヒ(モーゼ)、ルイ・ドヴォス(アロン)

「出エジプト記」に想を得たシェーンベルクの未完のオペラ「モーゼとアロン」を未完の第3幕も含め映画化。指揮はミハエール・キーレン、演奏はオーストリア放送交響楽団。ユダヤの民がエジプトの地を出るまでの兄弟の思想的対決を描く。



**アメリカ(階級関係)** 1983 - 84年 (126分/35mm版)  
 Klassenverhältnisse  
 撮影=ウィリアム・ルプジャンスキ  
 カフカの未完の長編小説「失踪者」(旧題「アメリカ」)の映画化。故郷を追われ、船で単身アメリカにやってきたドイツ人青年カール・ロスマンが様々な階級関係の中で挫折し抵抗を繰り返す。主要場面はストップとフレームで撮影された。



**ロートリンゲン!** 1994年 (21分/35mm版)  
 Lothringen!  
 撮影=クリストフ・ボログ、エマニュエル・コロノ  
 国粹主義的作家モリス・バレスの長編小説「コレット・ボドゥシュ」の一部を用い、ストロープの生地でもある、フランス北東部ロレーヌ地方の中心都市メスの悲劇的な歴史が語られる。「ロートリンゲン」とは「ロレーヌ」のドイツ名である。



**あの彼らの出会い** 2008年 (68分/35mm版)  
 Quoi loro incontri  
 撮影=レナート・ベルタ  
 ハヴナーの神話的対話詩篇「レウコとの対話」の最後の5篇「人類」「神祕」「洪水」「ムーサたち」「神々」を映画化。古代ギリシアの神々、半神半人、森の精、死すべき運命を持つ人間らの間で交わされる対話がオリオンボスに見立てた山腹で演じられる。



**コルネイユ=プレヒト** 2009年 (80分/デジタル)  
 Cornelle - Brecht  
 撮影=クリストフ・クラウヴェール  
 副題「ローマ、私が恨む唯一のもの」。コルネリア・ガイサイ=コルネイユの「オオラス」第5巻第5場と「オトン」の短い一節を読む。その後、プレヒトのラジオ劇「ルクスの審問」が読まれる。編集の異なる3バージョン上映。



**ミッシェル・ドモンテーニュのある話** 2013年 (33分/デジタル)  
 Un conte de Michel de Montaigne  
 撮影=クリストフ・クラウヴェール  
 モンテーニュ学者アルマンゴーにより1934年にパリに寄贈され、ソルボンヌ大学北のポール・バンルヴェイ公園にあるポール・ランドアズキエのモンテーニュの生像の近くで、「エセー」第2巻第6章「実習について」がバルバラ・ウルリヒにより朗読される。



**水槽と国民** 2015年 (31分/デジタル)  
 L'aquarium et la nation  
 バリの東洋料理店の金魚の水槽の映像に続き、精神分析家エマ・ダゲルがカラーの小説「アルテンブルクのクルベの木」第二部の一節を読み上げ、最後にルノワールの映画「マ・マルセイユーズ」の抜粋が引用される。



**アンナ・マダレーナ・パウハの日記**  
 1967 - 68年 (93分/35mm版) Chronik der Anna Magdalena Bach  
 撮影=ウーゴ・ピッコネ / 出演=クスタフ・レオンハルト、ニコラウス・アルンクロー

10数年の構想を経て実現したストロープ=ユエルの原点となる野心的作。バロク期の作曲家J.S.バッハの後半生を、演奏場面を中心に妻の視点から語る。古楽器演奏の大家クスタフ・レオンハルトが大バッハに扮し、見事な演奏を披露する。



**フォルティニ、シナイの犬たち** 1976年 (83分/16mm版)  
 Franco Fortini/ Cani del Sinai  
 撮影=レナート・ベルタ  
 イタリアの詩人フォルティニが、「1967年の『六月戦争』」を機に執筆した政治的エッセー「シナイの犬たち」を作者自身が朗読する。ユダヤ人の父とカトリックの母を持つ著者のファシズム体験と、現代における中東紛争に対する階級闘争的解釈が交錯する。



**四部の提案** 1985年 (40分/デジタル)  
 Proposta in quattro parti  
 イタリア国营放送で1985年年末の深夜に放映された四部構成の番組。D・W・グリフィスの無声短編映画「小麦の買い占め」全篇、「モーゼとアロン」、「フォルティニ/シナイの犬たち」、「雲から抵抗へ」各抜粋で構成。



**今日から明日へ** 1996年 (62分/35mm版)  
 Von heute auf morgen  
 撮影=ウィリアム・ルプジャンスキ  
 12章技法によるシェーンベルク唯一の時事オペラを、ミハエール・キーレン指揮、フランクフルト交響楽団の演奏により映画化。リブレッドはシェーンベルク夫人による。倦怠期のブルジョワ夫婦のすれ違いと和解の室内劇が滑稽に描かれる。



**ヨーロッパ2005年、10月27日** 2006年 (12分/デジタル)  
 Europa 2005 27 ottobre  
 ストロープ=ユエルが初めてDVを用いたシネマトド。イタリア国营放送の委嘱により2006年春に撮られた。警察に追われ変電所に隠れていた15歳と17歳の移民少年が感電死したクリスマス=ボツの事故現場を撮影する。この事故が各地の暴動のきっかけとなった。



**おお至高の光** 2009年 (18分/デジタル)  
 O somma luce  
 撮影=レナート・ベルタ  
 ダンテ「神曲」天国篇・最終第33歌、第7節「おお至高の光」から最後までを、ジョルジュ・ハッセルローネが朗読する。冒頭の黒味にシュルレヒェン指揮、エドガー・ヴァレーズ「砂漠」初演ライブ演奏(1954)が流れる。



**ヴェネツィアの死(『ヴェネツィア70:リロードされた未来の1篇』)** 2013年 (2分/デジタル)  
 La Mori de venice (Venice 70 - Future Reloaded)  
 ヴェネツィア国際映画祭の第70回目を記念する連作動画「ヴェネツィア70:リロードされた未来」の一篇。バレスの旅行記「ヴェネツィアの死」第3章「アドリア海の水平線上に漂う影たち」の頁の一部とメモが映し出される。



**レナート** 2015年 (8分/デジタル)  
 Four Renato  
 編集=クリストフ・クラウヴェール  
 2015年4月1日、スイスのシェータートキナーバーゼルで撮影監督レナート・ベルタの70歳の誕生日を祝うために作られた。ベルタがウーゴ・ピッコネと共に撮影監督を手がけた「オトン」の抜粋と撮影現場の写真で構成。



**花婿、女優、そしてヒモ** 1998年 (23分/35mm版)  
 Der Bräutigam, die Komödiantin und der Zuhälter  
 撮影=クラウス・シリング  
 オーストリアの劇作家フェルディナント・ブルックナーの三幕戯曲「青春の病」を約10分に圧縮したミュンヘンでのストロープ演出の舞台上上演の映像に続き、その出演女優の結婚式とその後の顔末が描かれる。R・W・ファスビンダーらが出演。



**すべての革命はのるかそるかである**  
 1977年 (11分/35mm版) Toute révolution est un coup de dés  
 撮影=ウィリアム・ルプジャンスキ  
 ステファヌ・マラルメの革命的な詩「賽のひと振りは決して偶然を棄棄しないであろう」を、1871年のパリ・コミューンの闘士の最後の拠点となったパルム・ジャヌ墓地の芝生に座つて、様々な言葉を母語とする九人の男女が代わる代わる音楽的に朗読する。



**エンペドクレスの死** 1986年 (132分/35mm版)  
 Der Tod des Empedokles oder: Wenn dann der Erde Grün von neuem euch orgänirt  
 撮影=レナート・ベルタ  
 フリードリヒ・ヘーダーリンの1798年執筆の未完の二幕悲劇を完全映画化。古代シチリアの詩人哲学者エンペドクレスが民衆と訣別し、自ら死を選ぶまでの物語が、シチリアのブーサとエトナ山中腹を舞台に、晦婁な詩句によって語られる。



**シチリア!** 1998年 (66分/35mm版)  
 Sicilia!  
 監督=ウィリアム・ルプジャンスキ  
 シチリア出身の作家ヴェットリニの長編小説「シチリアでの会話」の一部分を、序曲と六つの楽章に再構成。主人公は15年ぶりにシチリア内陸の貧しい母の家を訪れる。彼は道中に偶然出会った人々と会話し、母に昔話を聞き、山間部の村の研ぎ屋と立ち話をする。



**アルテミスの膝** 2007年 (26分/35mm版)  
 Il Ginocchio di Artemide/Le Genou d'Artemide  
 撮影=レナート・ベルタ  
 「レウコとの対話」の一篇、エンデミュオンと見知らぬ者の対話「野獣」の映画化。監督名義はストロープ単独である。ハヴナー生誕100周年の2008年に公開予定だったが、2009年に延期された。出演は「あの彼らの出会い」のダリオ・マルコンチーニとアンドレア・バッツィ。



**ある相続人** 2011年 (22分/デジタル)  
 Un Héritier  
 撮影=レナート・ベルタ、クリストフ・クラウヴェール  
 バレスの「東方の砦」三部作の第一作「ドイツに仕えて」の抜粋に基づき、アルザス守護聖人の修道院がある聖オイレに於けるデジタル撮影。ストロープ自らロレーヌ人に扮し、ジョゼフ・ロトネル扮するアルザス人青年と対話する。



**影たちの対話** 2014年 (28分/デジタル)  
 Dialogue d'ombres  
 撮影=レナート・ベルタ  
 ストロープ=ユエルが1954年に映画化を構想したという、ペルナノスの1928年の同名小説に基づき、一組の男女あるいは彼らの影が木陰で対話する。パリで稽古された後、ブルマンデンのフルール近郊で撮影された。フランスワーズ役はコルネリア・ガイサイ、ジャック役はベルトラン・ブルデールが演じる。



**目下の進捗状況は? ジャン=マリー=ストロープ**  
 2016年 (9分/デジタル)  
 "Où en êtes-vous Jean-Marie Straub?"  
 2014年9月以来、ボンビッド・センターが企画に関連する映画作家に発注している動画コレクション「目下の進捗状況は?」の1本として、ストロープとユエルの全作品上映に際し、ストロープが自宅で猫たちと撮った動画。



ストローブ=ユイレの軌跡  
1962-2016  
Retrospective Straub-Huillet 1962-2016

上映スケジュール

第1期 2017年12月5日(火)～9日(土) (日曜・月曜休館 / 5日間)

- 12月5日(火)  
17:20 マホルカ=ムフ 1962(18分) 35mm版  
妥協せざる人々 1964-65(55分) 35mm版  
19:00 アンナ・マグダレーナ・バッハの日記  
1967-1968(93分) 35mm版
- 12月6日(水)  
16:40 花婿、女優、そしてヒモ 1968(23分) 35mm版  
オトン 1969(88分) 35mm版  
19:00 歴史の授業 1972(85分) 16mm版
- 12月7日(木)  
16:30 アーノルト・シェーンベルクの《映画の一場面のための伴奏音楽》入門 1972(15分) 16mm版  
モーゼとアロン 1974-75(105分) 35mm版  
19:00 フォルティエニ / シナイの犬たち 1976(83分) 16mm版
- 12月8日(金)  
16:30 すべての革命はのるかそるかである 1977(11分)  
雲から抵抗へ 1978(105分) 35mm  
19:00 早すぎる、遅すぎる 1980-81(101分) 16mm版
- 12月9日(土)  
14:30 アン・ラシャジャン 1982(8分) 35mm版  
アメリカ(階級関係) 1983-84(126分) 35mm版  
17:10 四部の提案 1985(40分) デジタル版  
18:00 トーク 持田睦(演出家)×渋谷哲也(ドイツ映画研究者)

第2期 2017年12月12日(火)～16日(土) (日曜・月曜休館 / 5日間)

- 12月12日(火)  
16:20 エンバドクレスの死 1986(132分) 35mm版  
19:00 黒い罪 1988(40分) 35mm版  
セザンヌ 1989(50分) 35mm版
- 12月13日(水)  
16:50 アンティゴネー 1991-92(100分) 35mm版  
19:00 ロードリッゲン! 1994(21分) 35mm版  
今日から明日へ 1996(62分) 35mm版
- 12月14日(木)  
17:20 シチリア! 1998(66分) 35mm版  
19:00 労働者たち、農民たち 2000(123分) 35mm版
- 12月15日(金)  
16:40 放蕩息子の帰還 / 辱められた人々 2003(64分) 35mm版  
ルーブル美術館訪問 2004(48分) 35mm版  
19:00 あの彼らの出会い 2006(68分) 35mm版  
ヨーロッパ2005年・10月27日 2006(12分) デジタル版
- 12月16日(土)  
14:30 アルテミスの膝 2007(26分) 35mm版  
ジャン・ブリカールの道程 2009(40分) 35mm版  
16:10 魔女一女だけで 2009(21分) 35mm版  
ジョアシャン・ガッティ 2009(2分) デジタル版  
コルネイユ=プレヒト 2009(80分) デジタル版  
18:00 トーク 廣瀬純(映画・現代思想研究者)

第3期 2018年1月23日(火)～27日(土) (日曜・月曜休館 / 5日間)

- 1月23日(火)  
17:40 おお至高の光 2009(18分) デジタル版  
ある相続人 2011(22分) デジタル版  
ジャツカルとアラブ人 2011(11分) デジタル版  
19:00 慰めようもないもの 2011(15分) デジタル版  
母 2012(20分) デジタル版  
ミッシェルド・モンテーニュのある話 2013(33分) デジタル版
- 1月24日(水)  
17:30 ヴェネツィアの死 2013(2分) デジタル版  
影たちの対話 2014(28分) デジタル版  
ヴェネツィアについて 2014(24分) デジタル版  
19:00 共産主義者たち 2014(70分) デジタル版  
アルジェリア戦争! 2014(2分) デジタル版
- 1月25日(木)  
17:40 水楳と国民 2015(31分) デジタル版  
レナートに 2015(8分) デジタル版  
目下の進捗状況は? ジャン=マリー=ストローブ 2016(9分) デジタル版  
19:00 マホルカ=ムフ 1962(18分) 35mm版  
妥協せざる人々 1964-65(55分) 35mm版
- 1月26日(金)  
17:00 アンナ・マグダレーナ・バッハの日記  
1967-1968(93分) 35mm版  
19:00 花婿、女優、そしてヒモ 1968(23分) 35mm版  
オトン 1969(88分) 35mm版
- 1月27日(土)  
13:50 歴史の授業 1972(85分) 16mm版  
15:50 アーノルト・シェーンベルクの《映画の一場面のための伴奏音楽》入門 1972(15分) 16mm版  
モーゼとアロン 1974-75(105分) 35mm版  
18:00 トーク 藤村晶子(現代音楽研究者)  
×渋谷哲也(ドイツ映画研究者)

第4期 2018年2月20日(火)～24日(土) (日曜・月曜休館 / 5日間)

- 2月20日(火)  
17:00 フォルティエニ / シナイの犬たち 1976(83分) 16mm版  
19:00 すべての革命はのるかそるかである 1977(11分)  
雲から抵抗へ 1978(105分) 35mm
- 2月21日(水)  
16:20 早すぎる、遅すぎる 1980-81(101分) 16mm版  
18:30 アン・ラシャジャン 1982(8分) 35mm版  
アメリカ(階級関係) 1983-84(126分) 35mm版
- 2月22日(木)  
17:20 四部の提案 1985(40分) デジタル版  
18:30 エンバドクレスの死 1986(132分) 35mm版
- 2月23日(金)  
17:00 黒い罪 1988(40分) 35mm版  
セザンヌ 1989(50分) 35mm版  
19:00 アンティゴネー 1991-92(100分) 35mm版
- 2月24日(土)  
15:00 ロードリッゲン! 1994(21分) 35mm版  
今日から明日へ 1996(62分) 35mm版  
16:50 シチリア! 1998(66分) 35mm版  
18:00 トーク 諏訪敦彦(映画監督)

第5期 2018年2月27日(火)～3月3日(土) (日曜・月曜休館 / 5日間)

- 2月27日(火)  
16:30 労働者たち、農民たち 2000(123分) 35mm版  
19:00 放蕩息子の帰還 / 辱められた人々 2003(64分) 35mm版  
ルーブル美術館訪問 2004(48分) 35mm版
- 2月28日(水)  
17:10 あの彼らの出会い 2006(68分) 35mm版  
ヨーロッパ2005年・10月27日 2006(12分) デジタル版  
19:00 アルテミスの膝 2007(26分) 35mm版  
ジャン・ブリカールの道程 2008(40分) 35mm版
- 3月1日(木)  
16:40 魔女一女だけで 2009(21分) 35mm版  
ジョアシャン・ガッティ 2009(2分) デジタル版  
コルネイユ=プレヒト 2009(80分) デジタル版  
19:00 おお至高の光 2009(18分) デジタル版  
ある相続人 2011(22分) デジタル版  
ジャツカルとアラブ人 2011(11分) デジタル版
- 3月2日(金)  
17:20 慰めようもないもの 2011(15分) デジタル版  
母 2012(20分) デジタル版  
ミッシェルド・モンテーニュのある話 2013(33分) デジタル版  
19:00 ヴェネツィアの死 2013(2分) デジタル版  
影たちの対話 2014(28分) デジタル版  
ヴェネツィアについて 2014(24分) デジタル版
- 3月3日(土)  
15:30 共産主義者たち 2014(70分) デジタル版  
アルジェリア戦争! 2014(2分) デジタル版  
17:10 水楳と国民 2015(31分) デジタル版  
レナートに 2015(8分) デジタル版  
目下の進捗状況は? ジャン=マリー=ストローブ 2016(9分) デジタル版  
18:00 トーク 和田彦彦(イタリヤ文学者)  
×渋谷哲也(ドイツ映画研究者)

■各回入れ替え制

■全作品日本語字幕付き

■料金

一般=1回券1000円 / 3回券2400円  
アテネ・フランセ文化センター会員、シニア、学生:  
1回券=800円

※アテネ・フランセ文化センター会員入会をご希望の方は登録が必要になります。

登録料:一般=1500円 / アテネ・フランセ学生=1000円

※本特集の半券をお持ちの方は、トークにご参加いただけます。

■会場&お問い合わせ

アテネ・フランセ文化センター

東京都千代田区神田駿河台2-11 アテネ・フランセ4F

(JR-地下鉄 御茶ノ水駅 / 水道橋駅徒歩7分)

TEL 03-3291-4339 (13:00-20:00)

<http://www.athenee.net/culturalcenter>



ジャン=マリー・ストローブ Jean-Marie Straub  
ダニエル・ユイレ Danièle Huillet

ジャン=マリー・ストローブ(1933～)とダニエル・ユイレ(1936～2006)は40年以上にわたって共同で挑発的な映画を作った。ローマ地方メス出身のストローブは、徴兵忌避のため58年に西ドイツに亡命、さらに69年にローマに生活・活動拠点を移した。彼らの作品の大半は先行する文芸作品に基づくが、その原典の本文の扱いは厳密で、叙述内容の伝達を効率化する改変は避けられる傾向にある。高度に文学的なドイツ語、フランス語、イタリア語の3か国語を用いて作られる彼らの映画は、2006年のダニエル・ユイレ死後もその基本姿勢を変えることなく、ストローブによって継承されている。音声言語の含蓄、音楽的抑揚に重きをおいており、その厳密な画面構図と時間構成、計算された身ぶりや廃棄しえない偶発性の弁証法は、映画表現の革命的な潜在力を示唆している。



渋谷哲也編

『ストローブ=ユイレ』

——シネマの絶対に向けて——

執筆: 赤坂太輔、伊藤はに子、小瀬京子  
金子遊、サリー・シャフトウ、渋谷哲也  
筒井武文、竹峰義和、千葉文夫、中尾拓哉  
中島裕昭、細川晋、堀調之、持田睦  
A5判上製 368頁 / 定価4200円+税

2017年12月刊行予定

森話社刊